意見交換の主な意見

●委員

・基本計画（案）については、現時点で大きな修正を求める点は特にない。

・今後のスケジュールでは、花苗・植物の調達が特に重要であり、令和10年春の開催を見据えると、開催1年前までには品種・数量を確定する必要がある。そのため、実施設計は今後1年程度で完了させる必要があり、全体としてタイトなスケジュールであると感じている。基本構想・計画を現場レベルに具体化し、事項ごとに速やかに決定していくことが重要であり、新体制での協議に期待している。

・パートナー会場については、各市町が予算措置に苦慮されている状況ではないかと感じている。県には、国の補助制度の活用等に向けた調整や支援に積極的に関わってほしい。

・緑化フェアを一過性のイベントに終わらせず将来にわたる県の施策につながる取組となることを期待している。

●座長

・重要な意見が複数寄せられた中で、特にパートナー会場における予算措置や、その後のフォローについて、県としての考え方に関する質問があった。

・この点について、現時点で事務局から回答できる内容があれば、説明をお願いしたい

●事務局

・緑化フェアのパートナー会場は、「自発の地域づくり」および「自然との共生について考え、行動するきっかけとする」という理念に共感された市町が手を挙げて参加いただいているものと受け止めている。

・現時点では、パートナー会場に対する補助金制度は設けていない。理由としては、補助金によって取組が一過性に終わる可能性があることや、県の資金拠出により市町のコンテンツ内容に県が関与することになりかねないと考えているためである。

・県としては、フェア来場者を県内各地のパートナー会場へ誘導し、市町がそれぞれの魅力を主体的に発信・PRいただくことを大切にしており、市町の創意工夫に期待している。

・一方で、県が何もしないわけではなく、共通ののぼりや表示物、スタッフ用ジャンパーなどの共通備品の整備や、公式ホームページ等を通じた広報面での支援については、積極的に行っていく考えである。

●委員

・パートナー会場の予算措置について意見を述べたい。

・市町がパートナー会場の整備を行う場合、市町の計画を県がとりまとめて国に相談・要望することで、補助金や交付金（例：1/2補助など）を活用できる可能性があるのか、また、どのような方法が考えられるのか県の考えを伺いたい。

●事務局

・ご意見は、パートナー会場整備への直接補助ではなく、一般的な市町の公園整備に対する国の支援制度に関する質問だと理解している。

・市町が行う公園整備については、従来から国の交付金制度があり、県が市町の事業を取りまとめた上で、国に要望・協議する形で対応している。

・ハード整備に活用可能な交付金がある場合は、それらの活用を前提に、県を通じて国に申請する対応を行っており、今後も、制度内容を整理・検討しながら、活用可能な交付金については積極的に活用していく考えである。

●座長
・今後については、さまざまな手法が考えられるほか、新たな制度等が創設される可能性もあると思われるため、引き続きご検討いただければと思う。
・併せて、現在のパートナー会場について一点確認させていただきたい。本日配布されている資料および、先ほどご説明いただいたスライドに掲載されているパートナー会場一覧を拝見したところ、有田ポーセリンパークが他の会場とは異なる色で表示されているように見受けられたので、ご説明をお願いしたい。

●事務局
・パートナー会場は、市町に加え、地域の特色ある取組や民間団体・民間事業者からの手挙げも呼びかけている。
・資料の地図において、青色で表示している会場は、市町から手挙げをいただいたもので、例えば市町が管理する都市公園等が該当する。
・一方、有田ポーセリンパークは、民間事業者から手を挙げていただいた会場であるため、他の会場と区別して色分けして表示している。

●座長
・募集段階では「市町」や「地域」といった表現が中心で、民間企業の参画が分かりにくかった印象がある。手を挙げたい民間企業が他にもあるかもしれないので、募集期間が残っている中で、民間企業にも参加を呼びかけることを意識した広報が重要である。
・「パートナー会場」という名称に限定せず、「パートナースポット」など市町主体の会場と区分した仕組みを設けることで、小規模な店舗や施設なども参加しやすくなると考える。県内に点在する形で広がっていくことは意義があり、民間企業や商店街、学校等の参画も考えられる。民間活力の活用やボランティアとの連携も有効である。
・資材や花苗の調達については、近年の物価上昇を踏まえると、準備の遅れが将来的な調達困難につながる懸念がある。今後の他都市での大規模イベント動向も考慮し、業界団体と連携しながら、生産調整を含めた計画的・早期の調達を進めることが重要である。

●委員
・基本計画の内容は理解した。
・各主要会場では花壇による演出が中心となり、多くの花苗が必要になることが想定される。
・春開催では種子需要が全国的に集中するため、必要な種子が確保できない可能性も考えられる。種苗会社との調整は早期に行い、計画的に手配する必要がある。
・花壇用花苗に加え、鉢花などボリュームのある花材を活用することで、演出効果を高めることも検討してほしい。
・資材価格は高騰しており、材料費は 1.5～2 倍に上昇している。価格上昇を踏まえ、関係業界と早期に情報共有・調整し、必要な資材の確保を早急に進めることが重要である。

●座長

・資材調達は花の種子や培養土を含め非常に厳しい状況にあり、価格も高騰している。安価さを優先するのではなく、植物に見合った適正価格で良質な資材を使用することが重要であり、事務局による全体調整やフォローが必要である。
・屋外中心の緑化に加え、鉢物や観葉植物を活用した屋内緑化も検討の余地がある。県庁や公共施設など来訪者の多い屋内空間での展開は、緑化フェアの広がりにもつながると考える。
・花壇づくりについては、全国的に一年草中心から宿根草を活用した持続的な花壇へと潮流が変化している。開催まで約２年と限られた期間ではあるが、指定管理者等と連携し、宿根草を早期に一部仕込み始めることで、開催時には一定の効果が期待できる。
・緑化フェアを GREEN EXPO の翌年開催のレガシーある取組とするためにも、一年草だけでなく質や持続性を意識した花壇づくりが必要ではないかと考える。
・資材調達については、早い段階から関係企業・団体と意見交換を行い、計画的に進めてほしい。

●委員
・福岡フラワーショーを訪れた際、坂道や会場の広さ、距離感の分かりにくさが不安に感じる場面があったが、高齢者やハンディのある方にとっては重要な視点だと感じた。特に吉野ヶ里歴史公園のように広大な会場では、初めて訪れる方でも安心して回遊できる仕組みづくりが重要である。佐賀県の「さがすたいる」の取組と連携し、誰もが迷わず楽しめる環境整備を進めてもらえれば、佐賀らしい緑化フェアになると思う。
・基本計画に「グリーンインフラ」という言葉が盛り込まれた点を高く評価している。防災・減災だけでなく、健康づくりや子育て、福祉など社会課題の解決にも可能性があることを、例えば、大学等と連携して研究し、その成果などを可視化する取組があれば、グリーンインフラへの理解が深まるのではないか。
・子どもたちによる生き物調査など、県内で行われている身近で意義ある自然環境の取組や、県内に８つある「自然共生サイト」の活動について、緑化フェアと連動した広報を行い、県民の参加を後押しする仕組みができれば緑化フェアの意義がさらに深まるのではないか。

●座長
・子育て世代や高齢者、障がいのある方など、誰もが参加しやすい環境づくりは重要であり、緑化フェアを契機に県営公園がより使いやすくなったと実感できること自体が、大きなレガシーになると感じている。
・グリーンインフラについては、大きな理念にとどまらず、会場づくりや開催期間中の取組の中で、どのように具体化していくかが重要である。
・基本計画では、「過去・現在・未来」という時間軸とともに、「グリーンインフラ」と「グリーンコミュニティ」が明確に位置付けられており、この二つを軸に据えたことは大きな意味を持つと思う。グリーンインフラが、地域やコミュニティの中に落とし込まれたときに、福祉やウェルビーイングといった価値が見えてくると考える。
・花や緑を通じて、暮らしやコミュニティの基盤をどのように支え、それを県民や来場者にどう伝えていくかが重要であり、緑化フェアを一過性で終わらせず、終了後の活用を見据えた取組が求められる。行政だけでなく、市民や団体との連携を大切にすることが、佐賀らしい緑化フェアにつながると感じている。

●委員

・コンテンツについては、専門分野の委員から前向きで具体的な意見が多く出ており、２年後の開催に向けて成功が具体的にイメージできる計画になってきていると感じている。
・一方で、全国からの来場を想定した場合、宿泊の視点が計画上やや弱いのではないかと感じた。交通計画は整理されているが、「どこに泊まり、県内をどう回遊してもらうか」という視点が、今後の実施計画や広報の中で重要になるのではないか。宿泊施設とパートナー会場等を結びつけた回遊イメージを、分かりやすく示す工夫があるとよい。
・「パートナー会場」に加えて「パートナースポット」の考え方も有効であり、民間企業の参画という視点では、緑化フェアに合わせた体験ができる旅館や宿泊施設の庭園、キャンプ場など多くのスポットを紹介し、県内各地の花・緑・食・観光資源を組み合わせて佐賀県全体を舞台とした緑化フェアとして展開することで、より魅力的な取組になると感じている。

●座長
・メイン会場やパートナー会場が県内全域に点在していることを踏まえると、「回遊がイメージできること」は非常に重要である。来場者が時間不足で回り切れないことがないよう、佐賀全体を楽しめる回り方を示す必要がある。
・回遊については、広報上の工夫だけでなく、計画そのものの中でどのように位置付け、設計するのかを明確にしてもよいのではないか。特に、吉野ヶ里歴史公園は立地上、公共交通だけでは回遊しづらい面があり、シャトルバスの導入やバス事業者との連携なども検討の余地がある。
・福岡フラワーショーでは、ラッピングバス自体が人気コンテンツとなっており、交通がイベントの魅力を高める好例だと感じた。
・回遊という視点では、旅館・宿泊施設やキャンプ場など、緑や自然を体感できる場所とも連携し、緑化フェアと一体で巡れるルートとして示すことができれば、佐賀らしい展開になるのではいなか。
・旅行会社等とも連携し、「どのように巡り、どのように滞在するのか」が分かりやすく伝わる広報を行うことで、基本計画に回遊性の視点が加わり、全体像がより明確になると感じている。

●委員
・基本計画では、主たるコンセプトが明確に示され、現在は具体化・肉付けの段階に入りつつあると感じており、今後の展開を楽しみにしている。新たな組織体制の始動にも期待している。
・一点気になるのは、今後の取組拡大を見据えた企業との関わり方である。山の博覧会や関連事業を含め、社会貢献・地域貢献としての企業の支援を生かす仕組みを検討することが重要ではないかと感じている。例えば、メディア活用やマッチングに長けた団体との連携により、企業・行政・県民を結びつける仕組みが考えられる。
・各地域で活動する緑化ボランティアの取組を、県内企業が支援する形をつくることで、活動の持続性が高まり、緑化フェアや地域づくり全体の広がりにつながると考えている。

●座長

・企業とのつながりは、今後、協賛等も含めて重要なテーマになっていくと感じている。佐賀県では、一部の大企業による大口支援よりも、多くの方が少しずつ力を持ち寄ることで、大きな力になる県民性があるのではないかと思う。
・実際に、造園関係者や市町の方々にお声かけすると「少しずつでも協力したい」と言ってくださる方が多く、こうした形で参加できる「スポット」のような仕組みは有効だと考える。
・企業や地域とのつながりを通じて、会場を一か所に集約するのではなく、県内各地に点在し、佐賀県全体が一つの会場のように広がっていく姿を描けるとよい。
・それは公園や花壇に限らず、田園やクリーク、山や海といった佐賀の自然全体を生かすことにもつながり、今回の緑化フェアが目指す方向性そのものだと感じている。

●委員
・佐賀らしさを前面に出した取組ができれば、非常に魅力的な緑化フェアになると感じている。地価上昇率が全国上位となったことも、これまでの取組の成果であり、今回の緑化フェアが次のレガシーにつながることを期待している。
・特に印象に残ったのは「土」に関する議論であり、土を育むという視点を取り入れることは大変意義深い。開催まで約２年あることを強みに、今から少しずつ取り組むことで、開催時に価値ある取組になるのではないかと感じている。
・「パートナースポット」は、希望者の参画に加え、来場者が安心して回遊できるよう、例えば、約 200 メートル間隔で立ち寄れる小さなスポットを配置することが効果的であり、歩行の負担軽減にもつながると考える。
・回遊面では、歩行とバス利用を組み合わせ、「行きは歩き、帰りはバス」といった選択肢があることは、来場者にとって良い仕組みだと思う。
・開催期間が比較的長いため、来場者が特定の期間に集中しないよう、いつ訪れても楽しめる工夫が必要である。宿泊については、キャンプ場なども宿泊拠点として積極的に位置付ければ、佐賀の自然を深く体感できる宿泊体験になるのではないか。
・有明海と玄界灘という二つの海をはじめ、佐賀の自然や食の魅力を生かし、巡ること自体が体験となる回遊ルートを打ち出すことで、印象に残る緑化フェアになると考えている。

●座長
・200 メートル程度の間隔でスポットを配置するという考え方は、人が無理なく歩ける距離感として妥当であり、佐賀駅から佐賀城公園までのまちなか動線とも親和性が高い。徒歩動線に加え、シャトルバスの導入や乗り継ぎを工夫するなど、移動自体が体験となる仕掛けは、回遊性を高める上でも有効である。
・宿泊との連動も重要であり、県内に泊まりながら会場を巡れる仕組みがあれば、来訪者の県内滞在につながる。有明海・玄界灘・山間部など、佐賀の多様なエリアをつなぎ、緑化フェアと山の博覧会とのつながりが見える展開が佐賀らしさにつながる。
・基本計画については、県民や一般の方にも伝わりやすいよう、計画全体を象徴するメッセージやキーワードを視覚的に強調し、「グリーンインフラ」「グリーンコミュニティ」などは補足説明を加える工夫があるとよい。
・「技」「人」「志」により挑戦してきた佐賀の歴史を表した記述は非常に印象的であり、計画の中でも大切にしてほしい。全国的な動向やグリーンインフラが実施計画等にどう生かされるのか、また、従来の緑化フェアと一線を画すようなタイトルや愛称が計画内容としっかり結びつくことを期待している。

・全国のフェア関係者も最大のレガシーは人材と言っている。学校・地域・企業が連携し、花や緑を大切にする子どもたちが大人になり、次の担い手へつながる仕組みをどうつくっていくかが重要であり、若い世代の参加が将来への力になる。

●オブザーバー
・（吉野ヶ里歴史公園）夜間のライトアップや国エリアでの森の観察会については、実施主体を含め、国・県間で改めて確認・調整が必要と考えている。国エリアで実施する際の手続き等については、今後連携・協力していきたいので、令和８年度の基本・実施設計の進捗に合わせ、早めに情報共有してほしい。

●座長
・広域での開催となるため、スケジュール感を関係者間でしっかり共有することが重要である。他地域の事例では、準備段階でなかなか上手くいかない部分があったと聞いており、佐賀ではそうならないよう、計画的なスケジュール管理と十分な情報共有を行ってほしい。

●アドバイザー
・国際園芸博覧会の直後に佐賀県が全国都市緑化フェアを開催する意義は非常に大きい。
・基本計画において「グリーンインフラ」「グリーンコミュニティ」が、計画に明確に位置付けられている点を高く評価している。花や緑は情緒的装置ではなく、あらゆる社会課題を支える基盤であるという認識に立つ必要があり、グリーンインフラを支えるためには県民参加による継続的な取組が不可欠である。
・佐賀は、干拓やクリークなど、人と自然が共生してきた歴史を有する「自然共生のモデル県」である。
・環境づくりは行政だけでは担えず、県民一人ひとりが関わりの再構築が重要である。
・佐賀県の緑化フェアは「イベント」であるか「運動体」であるかが問われている。パートナー会場の分散配置は望ましい構成である。「県民参加」をより前面に打ち出した表現をしていただくと良い。
・国際園芸博覧会でも一般国民への訴求力が課題。BtoB にとどまらず、一般の県民に届くような BtoC の戦略をしっかり描いていくことで佐賀の緑化フェアはより成功につながるのではないかと考えている。

●座長
・多くの県民や企業の参画をいかに促すかが大きなテーマとして共有されたと感じている。特に、一般の県民にどう働きかけるかという BtoC の視点の重要性を改めて認識した。
・基本構想・基本計画では行政が枠組みを整理してきたが、今後の基本・実施設計段階では、地域、市町、企業、県民との関係づくりが大きな課題になる。市町や既存のパートナー自治体に加え、企業にも CSR の観点から積極的に参画を呼びかけてほしい。
・花や緑を通じて「佐賀を誇りに思う気持ち（シビックプライド）」を育むことが重要であり、それが暮らしの質やウェルビーイングの向上につながると考える。基本計画の大枠は維持しつつ、「参加」という視点をより明確に位置付けてほしい。
・パートナー会場は市町に限定せず、企業や県民も含めて参加いただくなど地方だからこそ実現できる佐賀らしさを発揮されることを期待している。